

「道はやがて開ける」

校長 染田 祥孝

先日、時代が平成から令和に変わるに当たって、NHKで、平成のそれぞれの時期に、各界で活躍した著名人にインタビューしていたものを改めて編集し、再放送する番組がありました。その中に武豊騎手のインタビューがありました。武豊騎手は、天才と呼ばれ、平成の時代に数々の記録を打ち立てた方です。彼の父親も、競走馬の飼育に関わる仕事をされていて、家も厩舎の隣にあり、彼は、物心ついたときから、馬や競馬に関わる人々に囲まれて成長していったそうです。

彼の進路である、「騎手になること」は、幼少期から自然と心の中に芽生え、徐々に大きくなっていきました。中学校卒業後、彼は騎手の養成学校に入学し、知識と技術を身につけ、やがて新人騎手としてデビューします。デビュー直後から、天才と呼ばれ、数々の記録を塗り替えていきますが、レース中に落馬し、しばらくリハビリを余儀なくされる不遇の時期もありました。その時、彼が思ったことは、「騎手は馬に乗れなかったら、ただの人で、何の役にも立たない」ということだそうです。そこから、もう一度復帰するまでの間、精神的にも一回り大きく、たくましくなっています。そして復帰後は、また、ダービーのヒーローとして活躍を続けていくのです。まさに彼は、平成時代の競馬界のプリンスでありました。

彼は、周囲から「天才だ。」と称賛されても、それで有頂天になることはなかったそうです。ほめ言葉は、ほめ言葉として受け止めつつも、レースでうまくいかなかったことこそ重要であると常に考え、うまくいかない理由を考え、次に生かそうと努力したそうです。ダービーで優勝すれば、騎手はもてはやされ、華やかで脚光を浴びますが、それは自分一人の勝利ではないということを、彼は誰よりもよく知っていました。これは幼少期から、競走馬の飼育や調教に関わる人々の中で育ち、馬主の思いや、周囲の方々の努力をよく見聞きして、深く理解していたからです。

武豊騎手のインタビュー番組を見て思ったことは、小さい時から、知らず知らずのうちに将来の進路を決めていたということの素晴らしさでした。歌舞伎役者の家に生まれた子が、幼い時から稽古に勤しむようになり、やがて一人前の役者になっていく。ミカン農家に生まれた子が、緑の山一面に黄色い実がたわわに揺れている風景を見て育ち、父祖伝来の地を守る後継者になっていく。子供の時に見た、親の姿や大人の生きざまが、将来の自分の進路に少なからず影響を与え、職業選択につながっていくということです。

武豊騎手は、幼い時からの漠然とした夢を、しっかりとした形にしました。蔭で、並々ならぬ努力をしたからこそ、夢を形にできたのだと思います。また、夢を実現するということは、その人の人生において、幸せなことで、誰しも望むところです。しかし、そのように幼少期からの夢が現実のものとなるということは、なかなかないことであり、大多数の人は、もともとの夢を別の夢に置き換えたり、将来の職業希望を途中で変更したりすることばかりだと思います。

同じの番組の中で、もう一人の方のインタビューも放映されました。映画監督の細田守さんです。彼は、高校の美術の先生に才能を見い出され、「お前は、絵描きになれ」と言われたことがきっかけで、大学で美術を専攻した後、少し回り道をしながら、映画監督となって名作を何本も産み出した方です。武豊騎手の道も、細田守監督の道も、それぞれ道のりやその形状は違うのですが、二人とも自分に最もふさわしい仕事にたどり着きました。「努力を続ければ、道はやがて開ける」改めてそう思った、平成31年4月29日の朝でした。